受付
6.11.19
議会事務局
総務課

（様式２）

令和６年１１月１３日

京丹後市議会議長　　様

会　派　名　無会派
代表者氏名　鳴海公軌　[redacted]

調査研究等報告書

下記のとおり実施しましたので報告します。

記

１　日程
　２０２４年１０月３０日（水）～１１月１日（金）

２　場所
・Ma・RooTs 京都府宮津市波路 716-3
・株式会社ローカルフラッグ　京都府与謝郡与謝野町字下山田 1342-1
・豊岡市役所 兵庫県豊岡市中央町２－４
・隼ラボ 鳥取県八頭郡八頭町見槻中１５４－２
・智頭町役場 鳥取県八頭郡智頭町智頭２０７２－１

３　目的
　福祉、ソーシャルビジネス、まちづくり、廃校活用、住民協働など複合的な視点からのまちづくりの現場を学び、参加者各位と意見交換することを通して、若い世代の政治参画の意義を深めるとともに、本市のよりよい公民連携のまちづくりにいかす。

４　該当する政務活動費の使途項目
　研修費

5　支出経費の内訳と金額

・研修参加費　　5,000 円

・宿泊費　　7,600 円

・移動費　　1,520 円（西日本旅客鉄道：鳥取駅から豊岡駅）

合計　　14,120 円

6　参加議員名

鳴海公軌

7　活動成果の概要、所見

別紙報告書に記載

8　成果物、資料等

別途提出

視察報告書
京丹後市議会議員　無会派　鳴海公軌

１　日程　　10月３０日～１１月１日

２　場所
・Ma・RooTs 京都府宮津市波路716-3
・株式会社ローカルフラッグ　京都府与謝郡与謝野町字下山田1342-1
・豊岡市役所 兵庫県豊岡市中央町２-４
・隼ラボ 鳥取県八頭郡八頭町見槻中１５４-２
・智頭町役場 鳥取県八頭郡智頭町智頭２０７２-１

３　目的
福祉、ソーシャルビジネス、まちづくり、廃校活用、住民協働など複合的な視点からのまちづくりの現場を学び、参加者各位と意見交換することを通して、若い世代の政治参画の意義を深めるとともに、本市のよりよい公民連携のまちづくりにいかす。

４　研修成果の概要と所見
【「ごちゃまぜの福祉」とまちづくり＃研修メモ】
複合型福祉施設Ma・RooTs　京都府宮津市波路716-3
社会福祉法人みねやま福祉会　京都府京丹後市峰山町呉服10番地

宮津市にある Ma.Roots さんにて、ごちゃまぜの福祉の実践と、共生のまちづくりの理念をみねやま福祉会常務理事櫛田啓さんの講演にて学ばせていただきました。
Ma.Roots は児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉、そして地域の一般の方々がまざりあうことを意図してつくられた複合型施設です。

ベースとなる考え方は３つあるように感じました。
１つは、ケアが必要な状態にある人もその人らしく命をまっとうする支援を目指すこと。
もう１つは、生きがいこそが、健康寿命を伸ばすこと。
最後は、「ごちゃまぜ」の現場の予想できない人と人の関わりが面白いということ。

特養に入居されていた歩くことが困難だったお年寄りが、子どもと関わり、歩行器で歩くようになり、ベビーカーを押し歩くようになり、歩行能力が回復し、退所された事例。

「歩きたい」という意欲を保つことが難しいお年寄りの方もおられるなかで、そう思える機会が「ごちゃまぜの福祉」にはあるということです。
心理学的には、他者への愛情という根源的な欲求を刺激する機会という見立てがあるとのことでした。

京丹後市をはじめ、日本全体が少子高齢社会に向き合わねばなりません。
近い将来、現役世代の人口が高齢者人口を下回ります。
少ない人数で、どうやって社会を守るか。
これまでのような現役世代が一方的に支える社会観ではなく、少しずつであろうがみんなでちょっとずつ支え合う社会にアップデートする必要があります。
今こそ、理念に基づいた、具体的な実践をどれだけ積み上げられるかが重要な局面です。

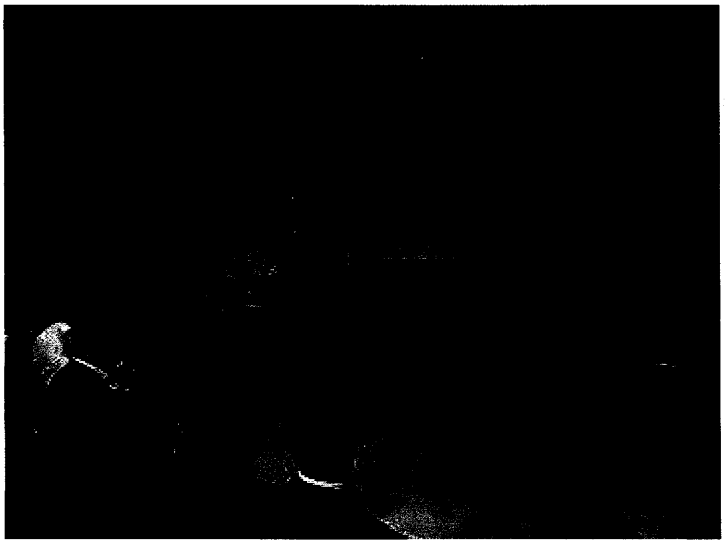
また、Ma.Roots の事例だけでなく、これからの過疎地域の福祉は共生・複合による福祉を展開していくことが活路だと仰っておられました。
子どもの数だけで考えると採算がとれなくなっても、高齢者福祉と複合することで、児童福祉を維持できるかもしれません。
単体では看護師を配置できなくても、多分野の福祉施設と複合させることで医療的ケアの必要な家族への支援ができるかもしれません。

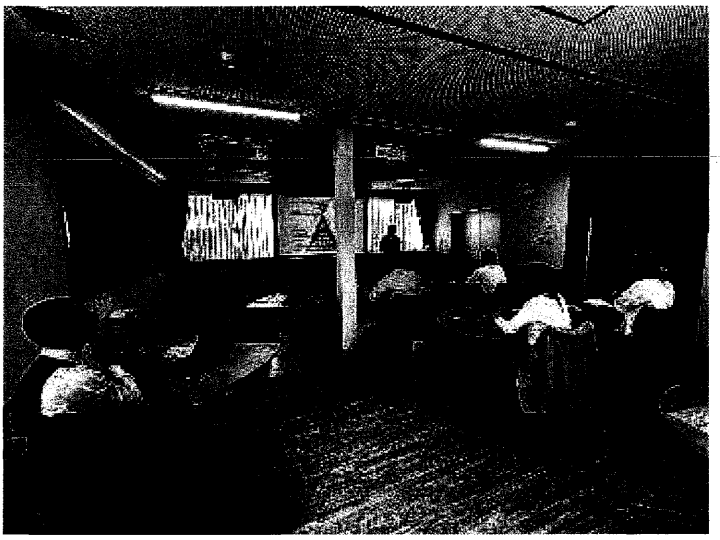
「ごちゃまぜ」という支え合い、共生、人との出会いによる福祉はまちづくりの原動力であり、どんな境遇の人でもその人らしく生ききることはまちづくりの目的でもあると感じました。
また、子育て環境の充実に向けた議論において、虐待予防や社会的擁護の価値観をもっと重視していくべきだと語られました。
僕も子育てする親の孤立、孤独感をなくすことが子育て環境日本一への道筋だと思っています。

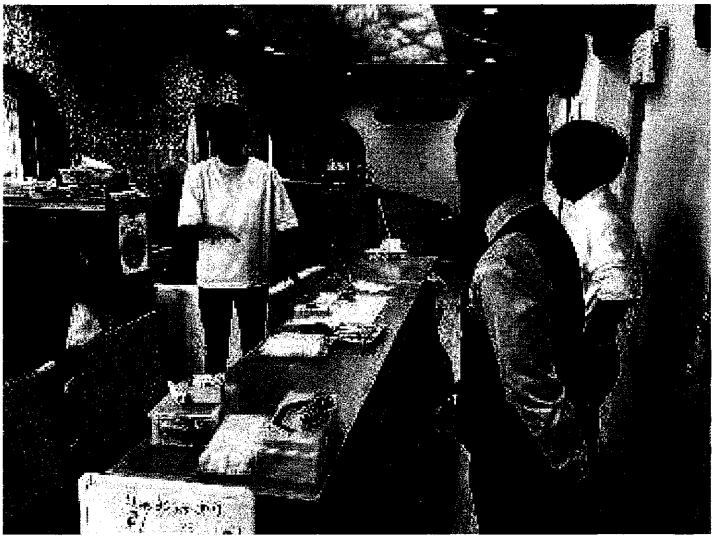
地域の活性化には、地域資源やプレイヤーをつなげるコーディネーター的、中間支援の役割は必要であり有効であるとしても、大きな雇用には展開できないという話が印象的でした。
与謝野町を「ホップのまち」から「ビールのまち」へ、産業を興すというシナリオの背景には様々な葛藤があったのだと感じました。

今はプロバスケットボールチーム京都ハンナリーズの公式ビールとなり、丹後から応援されるビールから「京都から応援されるビール」へと発展させているところだとのことで、聞いていてもワクワクしました。
丹後地域を「チャレンジしがいのあるまちにする」という想いは僕も賛同しているところです。

研修は全国から２０代議員が駆けつけており、ローカルフラッグの濱田社長も同世代ということから、共通の価値観を持ちながらさまざまに意見交換が進みました。
政治とビジネス、それぞれに軸をもち横断的に活動を展開することが若い議員の特徴のようにも思います。

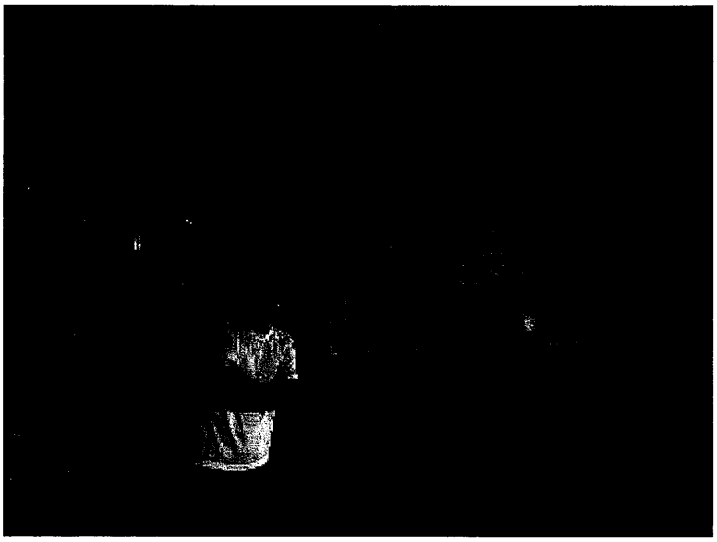






【ソーシャルビジネスで地域を興す！】
株式会社ローカルフラッグ　京都府与謝郡与謝野町字下山田 1342-1
地域から新たな挑戦が生まれ続け、人口減少してもなお、持続可能な地域づくりを目指す。

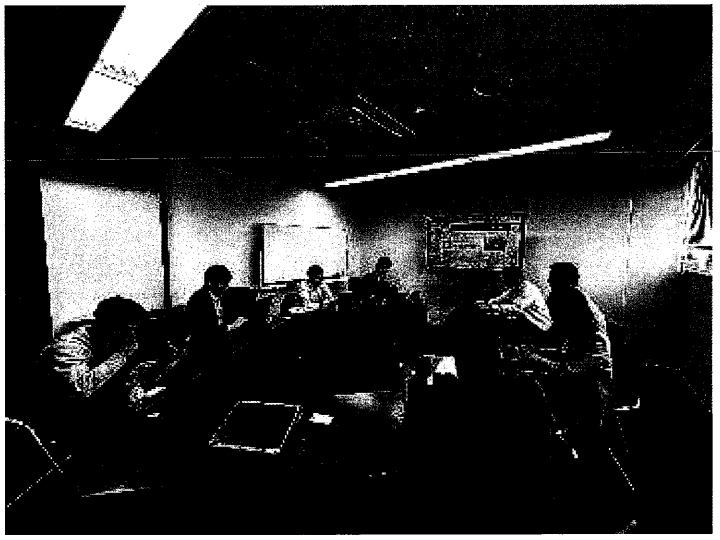
与謝野町にて株式会社ローカルフラッグ濱田社長からソーシャルビジネスの立ち上げから今の取組を学びました。
昨年、中小企業庁にて「社会課題解決のエコシステム構築」について学ぶなかで、その具体事例の一つとして丹後地域におけるソーシャルビジネスの立ち上げから、展開を聴かせていただきました。



【若者支援とまちづくり】
豊岡市くらし創造部地域づくり課

豊岡市くらし創造部地域づくり課にて、若者支援という切り口からのまちづくりを学びました。
今、力をいれておられるのがはたちを祝う会で、若者のキャリアに地元豊岡との接点を意図して創る取組をされていました。
今までの、政治家・来賓の方々が壇上におられる形式をやめ、はたちの方々が真に主役になれるようにと工夫をしているそうです。
特に、「当日配布物をゼロに！」「各中学校等の同窓会情報をとりまとめて、アクセスしやすいように」と、行政の立場より参加者の気持ちに憑依して設計されていると感じました。
こういった取組は京丹後市でも取り組み始めており、二十歳の方々が実行委員を組織し、活気ある節目の式典づくりに向けて参考になると思います。

また、結婚支援の取組の拡充についても、今後の展開が期待されます。
豊岡市の婚姻数の１割が施策によるマッチングだったということで、より注力していきたいということでした。
特に、京丹後と豊岡は生活、文化としてある程度共有されている所があり、市単位というより、広域的に参加できる仕組を作っていけたら、この地域により多くの出会いが生まれ、幸せが生まれるかもしれないと感じました。



【廃校活用のまちづくり】
隼 Lab.
鳥取県八頭町
人口：1.5 万人　高齢化率：36%　面積：206 ㎢
鳥取市に隣接。面積の約８割が森林。

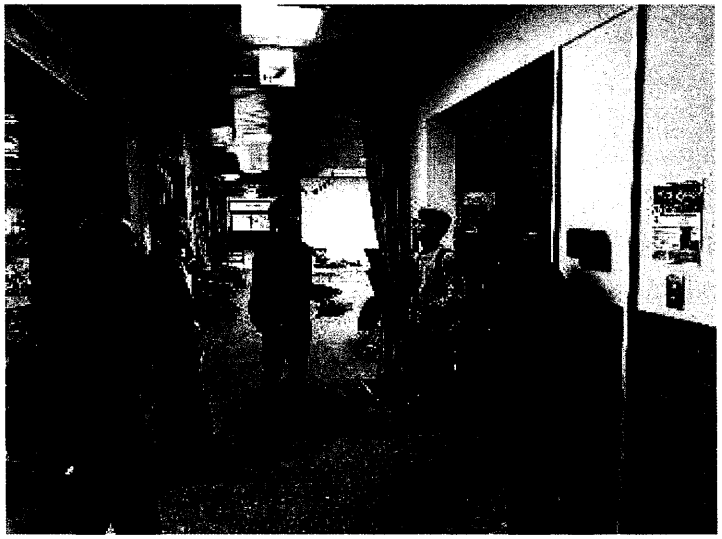
～持続可能な未来の田舎をつくる新たな地域拠点～（鳥取県八頭町）
学校統廃合によって複数の廃校が発生し、その活用として「隼 Lab,」を設置、運用しておられます。
シェアオフィス、コワーキングスペース、カフェ、コミュニティ活動の拠点、訪問看護ステーション、災害時の避難所などの複合施設として運営されています。

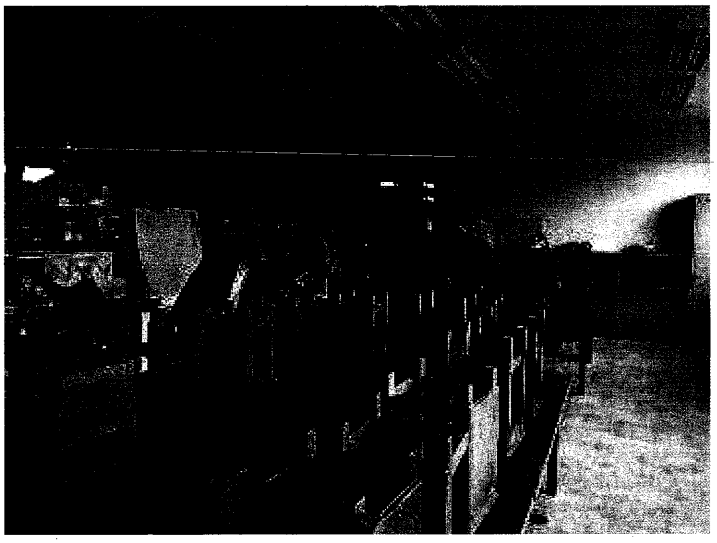
背景には、平成２４年ごろからの学校統廃合によって、６つの廃校が生じたことによる、地域コミュニティの希薄化、それに伴うあらゆる生活の悪循環を防ぎたいという課題認識からの取り組みということでした。
運営の在り方として、「普通財産」として町が所有、必要な改修による整備をし、シーセブンハヤブサという民間企業が管理運営を行っています。

計画段階から住民と企業の参画を求め、住民が日常的に利用する前提での意見集約を図られたとのことです。
「なんだか良いものがほしい」という気持ちになりがちな施設整備ですが、公共施設という視点から考える際に、「日常的に利用する前提と責任」に住民の方々を巻き込んでいくことは重要であり、簡単なことではなかったと思います。
結果的に、カフェスペースと元体育館が隣接しているため、多様な子育て世代の日常利用や、高齢者の方々のサロン活動、さまざまなワークショップの拠点になっているとのことでした。

整備費用は、約1.8億円で、その内、1/2は交付金を充当させたとのことです。
元々廃校になる前から良い状態の学校だったということもあると思いますが、良い状態の施設を活用するから整備費用を抑えられるということでもあると思います。

また、隼 Lab.という先進事例を持ちながらもすべての廃校を活用できているわけではないということで、廃校活用というジャンルの難易度の高さも痛感しました。





【住民×行政　住民による〝１００人委員会”】
智頭町役場 企画課
鳥取県八頭郡智頭町
人口：6172 人　高齢化率 45%　面積 224 ㎢　山林面積 93%　鳥取市から車で 40 分

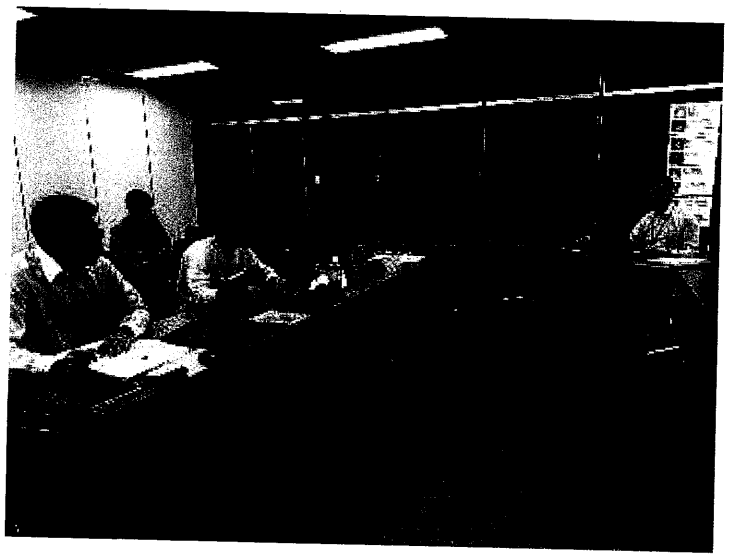
鳥取県智頭町での取り組みです。
住民が参加して、まちづくりのさまざまな分野にわかれてまちで実現したいことを議論し、提言し、実践していく仕組みが〝１００人委員会”です。
住民が任意で加入できる委員会で、そこから町の政策になったり、町から予算を得て実施したりと、実現方法はケースバイケースだそうですが、小回りの効くまちづくりの在り方だと感じました。

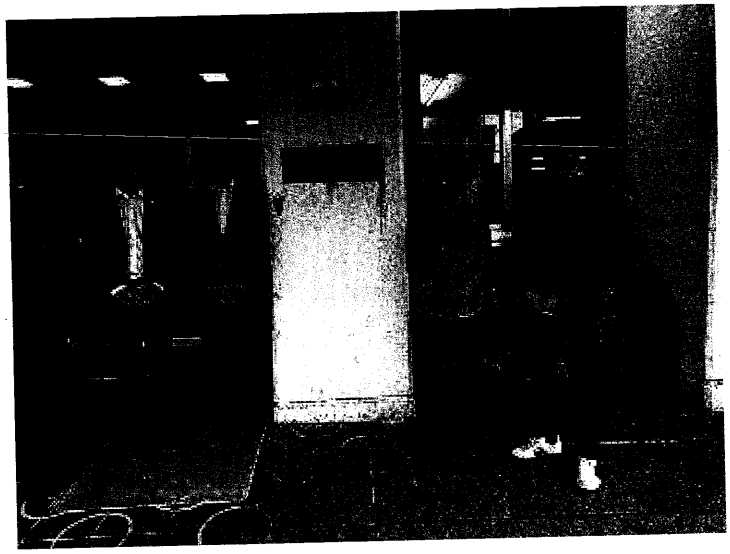
毎年、
・５月ごろから分野ごとに実現したいことを議論
・１０月ごろ委員会ごとに提案する内容の決定
・１２月に智頭町理事者に対し委員会から提案
・３月に次年度予算として議決
というサイクルだそうです。

例えば教育分野では森のようちえんの設立からサドベリースクールの設立へつながっていたりと、個性的な取組が醸成されていく仕組みだと感じました。
本来は議会議員の役割でもある（課題を整理し、住民と合意形成し、行政に提案することや、責任ある実践など）なと思い、議員活動としても参考になる取り組みでした。

役場の基本スタンスとして「知恵は住民から借りればよい」という想いのあらわれだとも伺いました。住民を信頼するまちづくりといっても良いかもしれません。
「おせっかいのまちづくり宣言」もしているそうです。
時間の関係でまちをくまなく見ることは叶いませんでしたが、心惹かれるまちだと感じました。

また、まちのコンセプトを「〝疎開〟のまち智頭」と謳い、関係人口を創出されてきました。
「疎開保険」という取り組みは興味深い政策でした。
災害時に智頭町に「疎開」できるという仕組みです。
被災した場合に、７日間智頭町で生活できる場所と食事を提供されるということで、年間１～２万円の保険代金で加入できるという仕組みです。
被災した時だけでなく、平時において地元特産品が送られたり、智頭町内の森林セラピーや宿泊を半額で利用できるという特典をつけているそう。
むしろ、関係人口づくりや、都会的暮らしからの〝疎開〟という文脈が強い制度で、京丹後市でも参考になります。





５　研修主体

全国２０代議員の会、OBOG 会